

古高ドイツ語 Tatian における 現在分詞の用法について — Tatian の原典の問題と関連して —

池田光則

キーワード 古高ドイツ語 Tatian 現在分詞

要旨 古高ドイツ語 Tatian のG写本のラテン語と翻訳の Ahd. の間には、現在分詞の使用に関して多数の一致しない箇所が見られる。このラテン語の分詞に対応する Ahd. の定動詞の使用は「真の原典」に帰せられるものではない。主動詞との結合の方法の分布を見る限り、これは原典からの逸脱であり、当時のドイツ語の構造の反映である。このことからドイツ語では Ahd. の時代においてすでに現在分詞の使用を回避する傾向があったことが窺える。

1. はじめに

現代のドイツ語においては、英語と比較すると現在分詞の使用はきわめて少ない (Curme 1977, 63)。ところが、Sievers の編纂した Tatian (以下 T と略) の古高ドイツ語 (以下 Ahd. と略) 訳には、現在分詞が非常に多く用いられている。塩谷 (1975, 90 f.) に、「古代から中世にいたるまで非常に多くの用例があり、Luther 以後きわめて減少したものは、現在分詞の用法である」と述べられているように、Ahd. では多数の用例が見られる現在分詞は、時代が新しくなるにつれてしだいに用例が減少したと考えるのが通例である。また塩谷は同じ箇所では、現在分詞の用例の減少は「ギリシャ語・ラテン語の語法の影響からの脱却であり、この点に関しては口語の自然な用法の導入である」として、現在分詞の使用はギリシャ語・ラテン語の影響であるということを示唆している。

Lippert (1974, 131) によれば、Ahd. の Isidor や Monsee-Wiener Fragmente においては、原典のラテン語で用いられている副詞的用法および絶対的用法の分詞はその半分以上が定動詞を用いて訳し換えられている。この

Isidor と Monsee-Wiener Fragmente は分詞の使用のみならず、語順の自由性など、Ahd. の文献の中では原典に拘束されている程度が比較的高くない文献である。その一方で、原典を忠実に訳出していると考えられる T には多くの現在分詞が見られることを考え合わせても、現在分詞の使用はラテン語の影響を受けていることは容易に想像できる。

このように T は多数の箇所ではラテン語の原典の現在分詞をそのまま Ahd. の現在分詞を用いて訳している一方、原典が現在分詞であるにもかかわらず翻訳では定動詞が用いられている箇所が見られる。これは、T の逐語訳に近い翻訳の性質を考えると注目に値する点である。ただし、T には「真の原典」の問題があるので、これをただちに原典から逸脱した現在分詞の回避と考えることはできない。本稿では、T の真のラテン語原典の問題および Ahd. の翻訳の性格を検討しつつ、Ahd. における現在分詞の用いられ方について論究したい。

2. Tatian のラテン語原典の問題

St. Gallen に残されている T の Ahd. の翻訳の写本（G 写本）には、ラテン語とドイツ語が左右に並べて書かれている。一見するとそのドイツ語はラテン語を逐語的に訳出したような印象を与える。しかし細部にはラテン語に対応するドイツ語が一致しない部分が見られる。このラテン語とドイツ語が相違している部分については次の三つの考え方が可能である。

第一は、ラテン語とドイツ語が相違している部分では、Ahd. の訳は、Vulgata 以前の聖書のラテン語訳から影響を受けているとする考え方である。第二の考え方は、T の Ahd. は G 写本に並べて書かれているラテン語から直接に翻訳されたものではなく、Ahd. の翻訳には全く別の原典が存在するというものである。そしてもうひとつは、ラテン語とドイツ語が一致していない部分では、翻訳者が他の部分より「自由に」翻訳を行ったとする考え方である。

T の Ahd. は、Diatessaron（共観福音書）のラテン語訳の最古の写本である Codex Fuldensis から直接に翻訳されたと考えられていた。しかも伝わっている Diatessaron のラテン語訳はすべてこの Codex Fuldensis に由来しているとみなされていた。そして St. Gallen の写本はこの Codex Fuldensis と非常によく一致しており、わずかに見られる相違は取るに足りないもので意味がなく、Ahd. の訳は本質的にこの G 写本のラテン語に正確に従っていると考え

られていた。¹⁾

しかし Diatessaron のラテン語訳は非常に早い時期に、すなわち Vulgata 聖書以前に成立している。それ故、Diatessaron のラテン語訳には、Vulgata 以前のラテン語の形が保たれていたということが考えられる。ところが、Codex Fuldensis は、Vulgata に一致するように改められており、これが、他の Diatessaron の翻訳の元になったとは考えられない。²⁾そしてこのことから、T の Ahd. 訳、特に G 写本のラテン語と相違している部分については、Vulgata より古いラテン語が反映しているという考え方が生じる。

この考えをさらに進めると、T の Ahd. 訳には、G 写本のラテン語とは全く別の原典が存在していたという考え方になる。

たとえば、Wissmann (1960) は、G 写本の Ahd. がラテン語と相違している箇所について、主として Vulgata 以前の聖書のラテン語訳の例を挙げて、G 写本の Ahd. により近い形のラテン語が存在することを実証している。そしてこれらの箇所は別の原典を模倣したことによるとしか考えられないとし、翻訳の自立性や自由は考えられるよりもずっと小さいと述べている。

また Ganz (1969) は T の Ahd. 訳のもう一つの写本 (B 写本) を示し、B 写本のラテン語と G 写本のラテン語が一致しない箇所では、B 写本のラテン語の方が G 写本のラテン語よりも、B・G 両写本で同一であるその箇所の Ahd. に近い場合があることを例証している。そして彼は G 写本のラテン語が Ahd. 訳の直接の原典である可能性を否定している。ただし Ganz は B 写本のラテン語を Ahd. 訳の直接の原典とはみなさず、Wissmann と同様に別の原典が存在したと考えている。

この Wissmann や Ganz, さらには Baumstark (1964) の考え方の前提は、Ahd. の翻訳は仮定の原典にきわめて忠実に行われているということである。彼らは G 写本のラテン語と Ahd. が相違している部分について、この Ahd. により近い形を Vulgata 以前の聖書や、様々な言語による T の Diatessaron の翻訳に求め、Ahd. と一致している原典の存在を示唆しているのである。

しかしながら、彼らのごくわずかの Ahd. の翻訳の自由は認めている。たとえば Wissmann (前掲書: 264) は、形容詞・所有代名詞が名詞を修飾する場合の語順、名詞・代名詞の属格が名詞に支配される場合の語順については、当時 (830年頃) のドイツ語に適合した翻訳がなされていることを指摘している。

このようにTの Ahd. にはごくわずかの自由な翻訳の余地が残されていることは否定できない。そこで問題となるのは、G写本におけるラテン語と対応する Ahd. が相違している部分の中で、真に原典から逸脱して「自由な」翻訳を行った部分と、単に原典とG写本のラテン語の相違によってG写本では異なっ
て見えるにすぎない部分を区別することである。この際区別の基準に考えられるのは、ラテン語と Ahd. の相違がかなりの頻度で一貫してあらわれているかどうかという点である。

この点から注目されるのは分詞の翻訳である。Tの Ahd. 訳では多数の現在分詞が用いられているが、Sievers の編纂したテキストでは、ラテン語に分詞があるにもかかわらず Ahd. では定動詞になっている箇所がかなり見られる。Wissmann (前掲書, 261) は、この部分についても古い聖書のラテン語訳に Ahd. と一致する定動詞が用いられているものがあることを指摘し、分詞の翻訳に関するG写本などにおけるラテン語とドイツ語の相違が真の原典からの逸脱ではないことを示唆している。しかし、翻訳に最小限の自由を認める見地からすると、真の原典が別に存在することを是認するとしても、他の聖書訳に Ahd. と一致する形があるからといって、それが原典と一致すると断定することはできない。実際に Ahd. 訳が原典から逸脱しているという可能性も考慮する必要がある。

本稿では、ラテン語で様々な用法で用いられている現在分詞の中で、特に副詞的用法の現在分詞に対応する箇所がしばしばTの Ahd. 訳では、分詞を用いずに定動詞によって訳されている事実注目し、それが実際の原典からの逸脱であった可能性について検討する。

その際ラテン語の現在分詞が Ahd. 訳で現在分詞のまま訳出されている箇所と定動詞が用いられている箇所の分布、および定動詞で訳出されている箇所における主動詞との結合の方法の相違の分布に言及し、原典の分詞の使用に対応する翻訳の定動詞の使用は Ahd. の翻訳に帰せられるかどうかを考察する。

3. 原典に依存した現在分詞の用法

この節ではTの Ahd. 訳にあらわれている現在分詞は、ラテン語の現在分詞および形式所相動詞の完了分詞をそのまま訳出したものであるということを見る。

以下では Sievers が編纂したテキストを利用するが、このテキストのラテン語は前述のように、Ahd. 訳の直接の原典ではないと考えられる。しかしながら、少なくともこのラテン語と Ahd. が両方とも分詞を用いている箇所は原典でもラテン語と同様な分詞が用いられていると考えることができる。たとえばラテン語の *descendit* に Ahd. の *nidarstigenti* が対応している箇所 (12, 8) について Baumstark (前掲書, 92) は、*descendit* の代わりに *descendens* という原文を考えている。その理由として彼は「古高ドイツ語の翻訳者が、原典に与えられていない分詞構文を自分の側で採り入れたとは考えられない」と述べている。この箇所のようにラテン語で分詞が用いられていないのに Ahd. 訳で部分が用いられている例はきわめて少数であり、原典の定動詞を翻訳者側が分詞で訳したと考えるより、原典の方がこのラテン語と異なって分詞であったと考える方が適切である。

以下では T の Ahd. 訳に用いられている分詞をその用法に従って 6 つに分類して、ラテン語との対応関係をみることにする。

(1) 付加語的用法

これは現在分詞が形容詞のように名詞を修飾する用法である。

inti lín riohhenti ni leskit (T. 69, 9)

et linum fumigans non extinguet (Mt. 12, 20)

現在分詞が名詞を修飾する場合、上例のようにその語順はラテン語に従って現在分詞が名詞に後置されることが多い。これは形容詞が名詞に付加される場合の語順とは異なる。

inti uuerde abahu in rehtu inti unebanu in slehta uega (T. 13, 3)

et erunt prava in directa et aspera in vias planas (L. 3, 5)

形容詞が単独で名詞に付加される場合、上例のようにラテン語の語順にかかわらず、形容詞は名詞に対して前置されているのが普通である。それに対して現在分詞が名詞に付加される場合には 69, 9 の例のようにラテン語の語順を模倣しているものがある。これはこの用法の現在分詞の使用におけるラテン語の影

響を示していると言えよう。

(2) 名詞的用法

現在分詞は単独であるいは冠詞・形容詞を伴って名詞的に用いられている。

Inti azstandanten quad (T. 151, 9)

Et adstantibus dixit (L. 19, 24)

(3) 定動詞の意味を補足するために用いられ、定動詞の目的語と一致する 現在分詞

特定の動詞はその意味を補足するために分詞を必要とする。この中には分詞が定動詞の主語と一致するものと定動詞の目的語と一致するものがある。定動詞の主語と一致する分詞の中で *wesan* と共に用いられる現在分詞は次項で扱う。さて、Tでは知覚動詞と共に用いられる現在分詞がこの範疇にはいる。

Gisah thie heilant Nathanahelan quementan zi imo (T. 17, 4)

Vidit Ihesus Nathanahel venientem ad se (J. 1, 47)

(4) 回説的用法

ラテン語では *esse* と現在分詞が結びつくいわゆる回説的用法がしばしば見られる。このラテン語にあらわれる *esse* と現在分詞の結合をTの Ahd. 訳では *wesan* と現在分詞の結合を用いて訳している。

Uuas lerenti in thinge iro sambaztagun (T. 103, 1)

Erat autem docens in synagoga eorum sabbatis (L. 13, 10)

またラテン語の形式所相動詞の完了分詞と *esse* が共に用いられている文を現在分詞と *wesan* の結合で訳している箇所も見られる。

managu bin ih thruenti hiutu in gisiune thuruh inan (T. 199, 5)

multa enim passa sum hodie per visum propter eum (Mt. 27, 19)

後者のラテン語の構文は形式所相動詞の完了時称である。前者の Ahd. 訳はラテン語の形式所相動詞 *pati* の完了分詞と *sum* の結合を機械的に *pati* と同じ意味の動詞 *thruen* の現在分詞と *bin* の結合で翻訳したと考えられる。

(5) 現在分詞の与格の絶対的用法

ラテン語の分詞の絶対的奪格は Ahd. では現在分詞の与格を用いて訳されている。

Thanan farantemo themo heilante folgetun zuene blinte (T. 61, 1)

Et transeunte inde Ihesu secuti sunt duo caeci (Mt. 9, 27)

Behaghel (1924, 431) は、この与格の絶対的用法について「ドイツ語ではラテン語の構造をうつす場合にのみあらわれる」と述べている。また Wilmanns (1906, 108) もゲルマン諸語で絶対的分詞を用いる傾向が小さいことを指摘している。

(6) 副詞的用法

定動詞によって表される行為・事象に様々な関係で付随する行為・事象を表す場合に現在分詞が用いられている。この現在分詞を本稿では副詞的用法の分詞と呼ぶ。この現在分詞は定動詞の主語と性・数・格（主格）において一致する。

Thô abur sih nidarneigenti screib in erdu (T. 120, 6)

Et iterum se inclinans scribebat in terra (J. 8, 8)

4. 現在分詞使用の回避

前節で見たように、Tの Ahd. 訳で現在分詞を用いている箇所は原典でも同様に分詞であったと考えられる。その意味でTの Ahd. 訳にあらわれている現在分詞は原典の分詞を機械的に訳出したものであると言える。

ところでTの Ahd. 訳には、ラテン語で分詞が使用されているにもかかわらず定動詞を用いて訳されている箇所が見られる。しかも、ラテン語の分詞がそのまま訳出されるか否かはその分詞の用法によるところが大きい。名詞的用法の分詞に対して関係代名詞と定動詞が用いられているのが11箇所 (110, 3等),

回説的用法の分詞に対して定動詞が用いられているのが2箇所(19, 9 ; 60, 14), 絶対的用法の分詞に対して定動詞が用いられているのが2箇所³⁾ある。これらの用法の分詞については、真の原典が分詞ではなかった可能性も考えられる。それに対して下の例のように副詞的用法の分詞に対してはその中の111箇所が Ahd. において定動詞になっている。この用法の現在分詞の約5分の1に相当する箇所で定動詞が用いられていることになる。

Gieng her thô zi themo andaremo, quad imo sama (T. 123, 5)
Accedens autem ad alterum dixit similiter (Mt. 21, 30)

副詞的用法に関しては、特に *respondens*⁴⁾ という分詞が分詞+定動詞の構文で61箇所用いられている中で、対応する *antlingenti* 等の現在分詞が用いられているのは23箇所にすぎず、残りの38箇所は Ahd. 訳では定動詞になっている。この *respondens* を用いた構文に関しては原典の分詞を定動詞で訳し換えたことが十分に考えられる。実際の用例を詳細に検討したい。

(a) Antlingota thô sîn muoter inti quad (T. 4, 11)
Et respondens mater eius dixit (L. 1, 60)

この例はラテン語の分詞に対応する定動詞が主動詞と接続詞 *inti* で結ばれ、かつ定形が第1位になった例である。

(b) Tho antuurtita Simon Petrus inti quad (T. 90, 2)
Respondens Simon Petrus dixit (Mt. 16, 16)

これは、主動詞と *inti* で結ばれて、分詞に対応する定動詞の前に *tho* が置かれて定形第2位になっている例である。

(c) Antlingita ther heilant, quad ci imo (T. 138, 8)
Et respondens Ihesus dixit ad illum (L. 7, 40)
Inti her tho antuurtita zi in, quad (T. 110, 2)

Et respondens ad illos dixit (L. 14, 5)

上例はラテン語の分詞に対応する定動詞が主動詞と接続詞なしに並置されていて定動詞第1位になっている。下の例は主動詞と接続詞なしに並置された定動詞の前に語が付加された例である。

- (d) Tho antlingita Petrus, quad imo (T. 161, 3)
Respondens autem Petrus ait illi (Mt. 26, 33)

これは、ラテン語の分詞に対応する定動詞が主動詞と inti なしに並置されていて、定動詞の直前に tho が置かれている例である。この tho は副詞とも考えられるし、(c) の2番目の例の tho とは異なり副文を導く従属接続詞とも考えることができる。

この(a)～(d)の4通りの訳し方に、(e)ラテン語の分詞をそのまま現在分詞で訳している箇所を加えて respondens には5種類の訳し方が対応している。

この5種類の訳し方の分布は次のようになっている。

節	1～49	50～89	90～109	110～129	130～169	170～209	210～244
(a)	1	0	1	0	0	0	0
(b)	4	1	11	3	0	0	0
(c)	1	0	0	1	2	0	1
(d)	0	0	0	3	4	4	1
(e)	2	11	2	5	2	1	0

この表からわかることは、ラテン語の分詞に対応して Ahd. 訳で定動詞があらわれている箇所の構文に前半と後半で明らかに相違が見られるということである。⁵⁾つまり、前半では、分詞に対応する定動詞と主動詞が並列の接続詞 inti で結ばれている箇所が比較的多く見られるのに対して、主に後半では分詞に対応する定動詞と主動詞は接続詞なしに並置されている。この inti が用いられている箇所では Ahd. 訳で定動詞が二つ inti で並置されている他の箇所に対応するラテン語と同様に、原典において分詞が用いられておらず、定動詞が二つ

et で並置されている可能性は十分に考えられる。しかし、翻訳で inti なしに定動詞が並べられている箇所では原典に et なしで定動詞を二つ並べている構文を仮定することはきわめて困難である。つまり、ラテン語で定動詞を二つ並べる際は、特に respondit と dixit を並べている箇所は29例あるが下の例のようにすべて接続詞 et が用いられているのである。またこの構文では従属接続詞の cum を用いた構文も見られない。

Antlingota ther heilant inti quad imo (T. 17, 5)

Respondit Ihesus et dixit ei (J. 1, 48)

Tho antlingita ther heilant inti quad imo (T. 155, 3)

Respondit Ihesus et dicit ei (J. 13, 7)

したがって、(c) や (d) の構文は、ラテン語の分詞＋定動詞の構文の分詞を Ahd. 訳で定動詞を用いて訳出したと考えるのが妥当である。また (d) の構文で tho を従属の接続詞とみなすと、ラテン語の分詞＋定動詞の構文を定動詞を用いた副文構造によって訳し換えたと考えることもできる。

さらに細かく見れば50節から89節の間は他の節よりもラテン語の分詞に対して Ahd. 訳も現在分詞になっている比率が高い。このように見ると分詞の翻訳方法だけで断定するのは困難であるが、Tの Ahd. 訳の翻訳者は一人ではなく複数の翻訳者が分担して翻訳し、⁶⁾ 翻訳者間の翻訳方法の相違が分詞に対する訳し方に反映していると考えられる。つまり、分詞に関してはラテン語と Ahd. 訳が一致していない箇所では「真の原典」に Ahd. 訳と一致する原文を仮定するよりも、その中のある部分では原典にとらわれず、定動詞を用いて訳出されたと考えられるのである。つまり現在分詞に代わる定動詞の使用は当時のドイツ語の構造の反映とみなされるのである。

以上のように、Ahd. の文献で比較的原典に忠実な翻訳がなされているとされる Tにおいて、副詞的用法の分詞がそれに対応する現在分詞ではなく定動詞を用いて訳されている箇所が多数存在するという事実は、ドイツ語はこの時代においてすでに、少なくとも副詞的用法の現在分詞の使用を回避する傾向があったということを示すものである。

注

- 1) Sievers (1966, XVIII), Ehrismann (1918, 277) 参照。
- 2) Murdoch (1983, 37) 参照。
- 3) Wissmann (1961, 261) 参照。
- 4) この語形の他にも *respondentes* 等の語形があらわれるが、本文に記した語形で代表させる。以下の *antlinginti*, *respondit*, *dixit* の場合も同様。
- 5) Tの Ahd. 本文は6人の写字生によって書写され、しかもその分担も明らかになっている。しかしこの表に見られる訳し方の相違の分布は写字生の分担とは一致しない。したがってこの表に見られる翻訳方法の相違を写字生に帰することはできない。
- 6) Murdoch (前掲書, 39) も参照。

使用テキスト

Tatian. Lateinisch und altdeutsch mit ausführlichem Glossar. Hg. von E. Sievers, 2. neubearbeitete Ausgabe unveränderter Neudruck. (Ferdinand Schöningh, Paderborn 1966)

参考文献

- Baumstark, A. (1964): *Die Vorlage des althochdeutschen Tatian* (Böhlau, Köln/Graz)
- Behaghel, O. (1924): *Deutsche Syntax*. Band II. (Carl Winter, Heidelberg)
- Betten, A. (1987): *Grundzüge der Prosasyntax*. (Max Niemeyer, Tübingen)
- Curme, G. O. (1977): *A Grammar of the German Language*. 2nd. ed. (Frederick Ungar Publishing, New York)
- Ehrismann, G. (1918): *Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters*. Teil 1. (C. H. Beck, München)
- Ganz, P. (1969): "Ms. Junius 13 und die althochdeutsche Tatian-Übersetzung". In: *PBB* 91.
- Köbler, G. (1971): *Verzeichnis der Übersetzungsgleichungen des althochdeutschen Tatian*. (Musterschmidt, Göttingen/Zürich/Frankfurt)
- Kühner, R./C. Stegmann (1976): *Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache*. 5. Aufl., Teil 2, Band 2. (Hahn, Hannover)
- Lippert, J. (1974): *Beiträge zu Technik und Syntax althochdeutscher Übersetzungen*. (Wilhelm Fink, München)
- Lockwood, W. B. (1968): *Historical German Syntax*. (Oxford).

Murdoch, B. O. (1983): *Old High German Literature*. (Twayne Publishers, Boston)

Sonderegger, S. (1974): *Althochdeutsche Sprache und Literatur*. (Walter de Gruyter, Berlin/New York)

Wilmanns, W. (1906): *Deutsche Grammatik. Gotisch, alt-, mittel-und neuhochdeutsch*. 3. Abt. (Karl J. Trübner, Strassburg)

Wissmann, W. (1960): "Zum althochdeutschen Tatian". In: *Indogermanica. Festschrift für Wolfgang Krause*. (Heidelberg)

塩谷 饒 (1975) 『ルター聖書のドイツ語』 (クロノス, 東京)

——東北大学文学部助手——